

（特別寄稿）

出土木簡からたどる水稻在来品種の1300年

西 尾 敏 彦

目 次

1. はじめに—出土木簡に記されていた水稻の品種名—
2. 木簡品種の‘足跡’をたどる
 - 1) 「畔越」「畦越」「あせ越」「あぜこし」の場合
 - 2) 「古法師」「法師子」「こぼし」の場合
 - 3) 「白稲」「しらしね」と4) 「白早生」「しろわせ」の場合
 - 5) 「足張」「檜張」「縮張」「すくはり」の場合
 - 6) 「地蔵子」「ちもとこ」「ちっこ」の場合
3. おわりに—古代品種からみえてきた在来品種の‘したたかさ’—

1. はじめに

—出土木簡に記されていた水稻の品種名—

木簡にあった稲の品種名 もう20年以上も昔のことだが、当時発掘調査が進められていた奈良・平安時代の官衙遺跡から^{かんが}「畔越」^{あぜこし}「古法師」^{「こほうし」}「白稲」^{しろいね}などといった文字を記した木簡が見つかり（図1参照）、話題になったことがあった。当初は用途がわからなかったが、やがてこれが江戸時代中期の南伊予の農書『清良記』にある稲の品種名と合致することがわかり、種粃の「種子札」であることが判明した。発見したのは、国立歴史民俗博物館の平川南教授ら^{1) 2)}。当時、官衙では種粃を俵につめ、品種名の札を付して保管していたのだという。

確かに『清良記』^{3)・注1)}をみると、「畦越」^{あごし}「大白稲」^{すくはり}「檜張」^{ちこ}「小法師」^{ちこ}「小児」など、木簡に類似の品種名が出てくる。同じころ書かれた『地方の聞書』⁴⁾に

も「すくはり」「白稲」「畦こし」が、また『会津歌農書』⁵⁾には「白稲」「白早稲」も登場する。まさしく奈良平安の品種がおよそ1000年後の江戸中期まで植え継がれてきたとみて差し支えないだろう。

古代稲品種の存在、その寿命 わが国の稲作に古代から品種が存在したことは、既に安藤⁶⁾が正倉院文書「賀茂馬養啓」^{かも の う ま かい の けい}にある「稲依子」「越特子」^{注3)}に注目、これが稲の品種であるとしている。古島⁷⁾も『散木奇歌集』などから、平安末期には「品種名とも云ふべきが現れて来る」とし、「たもとこ(ちもとこ)」^{注4)}「ほうし(法師子)」などの名をあげている。

だが、古代の品種の中に1000年後の江戸中期まで植え継がれてきた品種あろうとは。平川に指摘されるまで、だれも考えていなかった。嵐⁸⁾は佐賀県東松浦郡の4か村について、天明から昭和に至る150年間の坪刈累年帳に当たり、当時の品種の寿命は「長命の品種で早生で70年、中生で60～80年、晩生で50年ぐらい」と記している。私たちの常識にあった品種の寿命は多かれ少なかれこの範囲で、1000年も続く品種があろうとは誰もまったく念頭になかったといつてよい。

平川は出土木簡にあった品種(以下、「出土木簡品種」という)が江戸時代まで続いた理由について、律令制時代に施行されていた「国家による高利貸し―出挙制」⁹⁾の存在をあげている。出挙とは「毎年、春3月と夏5月に国家が民に稲を貸し付けて、秋の収穫後にふつうは5割の利息とともに徴収する制度」。貸しつける稲には特定の品種が種粃のかたちで給付された。まさに「権力による品種管理」¹⁰⁾だが、特定品種が並外れて長期間植え継がれたのには、こんな権力による支えがあったからだろう。「権力による品種管理」が、いつの時代まで継続されたかは明かでないが、木簡出土品種と同名の品種が江戸中期の農書にもみられたことは間違いない。

奈良平安と同じ名の品種が江戸中期まで植え継がれていた。だとすれば同じことが、その後の時代にもありうるのでは。

本稿は、そんな単純な動機ではじめた資料に残る品種の‘足跡’の調査の記録である。‘足跡’をたどった品種は出土木簡品種で『清良記』にも登場する「畔



図1「畔越」と記された木簡(「上高田遺跡第2・3次報告書」より)

越」「古法師(小法師)」「白稲」「足張(檣張)」「地藏子(小児)」「カッコ内は『清良記』での品種名)、それに『会津歌農書』にある「白早生」を加えた6品種である。

なお閲覧した資料名は文末に示したが、江戸時代の農書、^{じかたしよ}地方書^{注2)}、産物帳など、明治以降は農商務省や各府県の品種に関する調査報告書など、可能な限り多くの資料に当たった。閲覧が予想より円滑に進んだのには、幕府本草学者丹羽正伯編纂の『享保・元文諸国産物帳』と国立国会図書館の「デジタルコレクション」に負うところが大きい。前者は盛永・安田の編著書(1986)¹¹⁾を、後者はWebを利用させていただいた。記して感謝の証としたい。

2. 木簡品種の‘足跡’をたどる

表1～表6に、出土木簡の6品種が江戸中期以降の各時代に全国の各地域で残してきた資料上の‘足跡’をたどってみた。

表では、縦軸に北海道と沖縄を除く全国各道府県(国・藩)を、横軸には古代から現在に至る各時代を配置し、その交点に当該時代・地域に成立した資料にあった品種の(早晩性)・品種名、それが記録されていた資料名をそれぞれ太字表記で示した(但し疑問の残る品種名は細字表記)。

各表を通覧して驚くのは、奈良平安から長い年月を経過しているにもかかわらず、江戸中期まで6品種のすべてが各地の資料にその名を留めていることである。さらに驚かされるのは、明治になっても、そのうちの4品種がなお存続している。以下、そのひとつひとつについて検討してみたい。

1) 「畔越」「畦越」「あせ越」「あぜこし」の場合 (表1参照)

表1で「畔越」「畦越」「あせ越」「あこし」を名のる品種(以下、一括表示の場合は「畔越」という)の‘足跡’をたどってみた。興味深いのは、「畔越」が明治はおろか昭和に至るまで、しかも複数の地域で存在が認められたことである。

まず江戸中期だが。北陸・東山以西の各地域で‘足跡’が広く認められる。明治になっても関西・中国地方のかなり多くの地方で存在が認められ、昭和になっても、広島県世羅郡では昭和9年に栽培の記録がみられる¹²⁾。さらに高知県の『大豊町史』によると、旧天坪村の昭和22年の調査で「畦越し」の作付が記

録されている¹³⁾。また昭和37～40年(1962～65)に当時の農林省農林水産技術会議事務局が実施した「遺伝資源採集調査」でも、紀伊半島山間部で在来品種として5点採集されている¹⁴⁾。

表 1 地域・時代別にみた「あぜこし」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・平安～江戸前期 648～1680	江戸中期 1681～1780	江戸後期 1781～1867	明治・大正期 1868～1913	昭和以降 1926～
青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島	畦越:上高田遺跡木簡①				
茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川					
新潟 富山 石川		(晩種)畦越餅:耕稼春秋⑩ (種)早あぜこし、(中種)あぜ越:加賀国⑩ (晩種)あぜこし:越前福井領⑩			
福井 山梨		畦越, あぜこし, アセコシ餅:甲州中三郡⑫ 畦こし:下円井村文書⑫			
長野		(種)あぜこし(くろもち):信濃高遠領⑩ あぜこし:前島家文書⑪ (種)あぜこし:美濃国⑩			
岐阜		(種)あぜこし:伊豆国⑩ (種)あぜこし:駿河御厨村⑩ あぜ越, あぜこし, 畦越:柏木家文書① (種)白あぜこし(種)赤あぜこし(種)あぜこし:尾張国⑩			(種)あぜこし:遺伝資源⑨
静岡		(中種)あぜこし:近江金沢領⑩ あぜ越:地方竹馬集⑫		(種)畦越, 畦越種:府農試特報③	(稈)あぜこし:遺伝資源⑨ (稈)あぜこし:遺伝資源⑨
愛知 三重		(晩)あぜ越:地方閑書⑫		(中)あぜ越:主要農作物④ (種)畦越もち:果福品種⑥	(種)あぜこし:遺伝資源⑨ (稈)あぜこし:遺伝資源⑨
滋賀					
京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山					
鳥取 島根 岡山 広島 山口 (中国)			阿せこし:雑事紛冗解下④	(中)畦越:主要農作物④ 畦越:初年来沿革⑬	畦越:芸備農報④
徳島 香川 愛媛 高知		(疾中)畦越, (疾中)小畦越:清良記⑩			畦越し:大豊町史⑤
福岡 佐賀 長崎 熊本 大分 宮崎 鹿児島		(稈)畦割:苅岐国⑩ (種)あぜこし:豊後熊本領⑩ (中)あぜこし:日向国⑩	阿せこし:雑事紛冗解下④ (中)畦越:成形図説⑫		
地域不明					

注) 表中の文字列は左から順に、史料・報告書にあった1)品種の(早晚・稈種)、2)品種名(細字は疑問の残る品種)、3)掲載されていた史料・報告書略名(正式名称は文末の表参照)。末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

注目したいのは「畔越」に糯稲が多かったことである。表1に記録された「畔越」のうち半数近くが糯であった。『近江国高島郡領：郡方産物帳』¹⁵⁾には〈ぬぎなし、粳色赤、上餅〉とある。前述の遺伝資源採集調査で採集された5点についても、3点が粳2点が糯で、稈先が紫色や淡赤色のもの、穎が黄金色で、芒が長く発生甚とされるものもあった。粳稲の糯への変化は突然変異や自然交雑でしばしば起こるものだが、土地により人によって、ときに粳が好まれ、ときに糯が重用されたのだろう。

「畔越」は〈畔を越えるほど、稲がみのる〉という意味からきているのだろう。餅にしても美味であったこと、稔りの秋の穂波が美しかったことなどが幸いして、長く植え継がれてきたのだろう。

2) 「古法師」「法師子」「こぼし」の場合 (表2参照)

表2に福島県荒木田遺跡出土の「古法師」と『古今著聞集』『散木奇歌集』にある「こほうし」「ほうしこ」、江戸農書にある「こぼし」^{注3)} (一括表示は「古法師」)の「足跡」を示した。「古法師」は江戸中期には既に東北から九州までの各地で栽培されている。

もともと野生の稲はその生存戦略上有芒であった。私たちの祖先はそんな有芒稲から無芒稲を選び出してきたのだが、有芒種が普通であった時代に生まれた扱いやすい無芒種の「古法師」は大いに歓迎された。無芒の稲は剃髪の法師姿を連想させる。「古法師」はそうした人びとの関心に支えられ、全国に広がったに違いない。明治のはじめに農商務省が編纂した『米由來說略』には、天喜康平の頃〈支那ヨリ一種ノ米ヲ輸ス俗呼テ「ホウシゴ」トイフ〉とある¹⁶⁾。

ただし明治以降になると「古法師」は急減する。この時代になると無芒種も多くなるが、新しい品種の名として無芒を特掲する必要もなくなったのだろう。表には加えなかったが、興味深いのは江戸中期以降、「仙台坊主」「能登坊主」など、やはり無芒を意味する「坊主」名品種が急増していることである。新たに無芒品種が見出されたとき、人びとにとっては昔の高僧イメージの「古法師」より、近くの寺の坊さんにつながる「坊主」のほうが名づけやすかったのだろう。

表2 地域・時代別にみた「こほうし」「ほうし」「こぼし」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・奈良～江戸前期	江戸中期	江戸後期	明治・大正期	昭和期
	648～1681	1681～1780	1781～1867	1867～1926	1926～1989
青森	古法師：荒田目遺跡①	(晩)こぼし：郷村藤⑦ (晩)こぼし：耕作晰⑩			
岩手					
宮城		(糯)坊子：羽州米沢領⑩			
秋田					
山形					
福島					
茨城		(晩)コホウシ：常陸水戸領⑩			
栃木					
群馬					
埼玉					
千葉					
東京					
神奈川					
新潟		(粳)小法師(早)唐小坊師、等：佐渡国⑩		(早)コボシ：越佐の米⑫	
富山					
石川					
福井					
山梨					
長野		(早)こぼし(早)め黒こほうし(中)白こぼし：信濃筑摩郡⑩			
岐阜					
静岡		(中)あかほうし、(晩)伊勢小ほうし：遠江国⑩			
愛知					
三重					
滋賀					
京都	法師子、法しこ、ほうしこ：古今著聞集④ ほうしこ：散木奇歌集③				
大阪					
兵庫					
奈良					
和歌山					
鳥取		(中)ほうし：出雲国⑩			
島根		(晩)白こぼう：備前備中国⑩			出雲法師、本郷法師：芸備農報⑬
岡山		(晩)赤法師(くまの)：長門国⑩			
広島		(晩)小法師、(晩)こほうし等：両国本草⑭		広島コボシ：県の稲作50年⑪	
山口					
徳島					
香川		(中)小法師(晩)黒小法師(陸)畑小法師：清良記⑩			
愛媛				コボシ：日本農業史6⑧	
高知					
福岡		(晩)法師：筑前国⑩			
佐賀					
長崎		(晩)小坊師：肥後国熊本領⑩			
熊本					
大分					
宮崎					
鹿児島			(早)小穂星：成形成説⑮		
地域不明					

注) 表中の文字列は左から、史料・報告書にあった1)品種の(早晩・粳糯)、2)品種名、3)掲載されていた史料・報告書名。 末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

3)「白稲」「しらしね」と4)「白早生」「しろわせ」の場合 (表3・4参照)

表3には「白稲」「白和世」「白いね」「しろしね」「しらしね」(一括表示は「白稲」)、表4には「白早生」「白和世」「白わせ」「しらわせ」(一括表示は「白早生」)の‘足跡’をたどってみた。両品種とも芒や籾色が白かったのが品種名の由来なのだろう。農書にも「白稲」には〈白毛なるを以っていふなるべし〉¹⁷⁾、「白早稲」については〈籾・毛共ニ白シ〉¹⁸⁾とある。

表3・4をみると「白稲」「白早生」とも、江戸中期には東北から九州までの各地に多くの資料に記録がある。ただし明治になると、暖地での栽培は激減する。いっぽう寒冷地では、なお植え継がれていたらしく、昭和6年の冷害にも被害が少なかったという記録がある¹⁹⁾。青森県では大正2年(1913)に「白稲」が1409ha栽培されていたという²⁰⁾。前述の昭和37～40年の「遺伝資源採集調査」で採集された徳島県の「白稲」は「ケモミ」と俗称され、〈芒は甚で長〉とある。芒のめだつ品種だったのだろう。

ところで、なぜ寒冷地に「白稲」「白早生」が残ったのだろうか。考えられる理由はただひとつ、寒冷地に近年まで赤米(玄米が赤い)が多かったからではないだろうか。津軽の農書『耕作断』に「根の津軽米は赤米に候よし古往の伝へなり」とある²¹⁾。また「白稲ハ吉米ト称シ納祖米トシテ取扱レタ」²²⁾という話もある。「白稲」「白早生」の‘足跡’が寒冷地に集束していったのは、赤米が多かった寒冷地で納祖米としても望まれる白い米がとくに意識されたからだろう。そしてそれが、おのずから両品種の耐冷性を強める結果につながったのだろう。「白稲」「白早生」という名は芒の白い稲の一般名称とも考えられる。だがここまできると、やはり特定の品種と考えてよいだろう。また「白早稲」は〈コフハシ・匂ヒハセノルイ〉、つまり〈香ばしい匂い早稲の類〉であったとする記録もある。これもこの品種を長生きさせた理由であったのかも知れない²³⁾。

表3 地域・時代別にみた「白稲」「しろいね」「しらしね」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・平安～江戸前期 648～1680	江戸中期 1681～1780	江戸後期 1781～1867	明治・大正期 1868～1926	昭和期以降 1926～1989
青森		(晩)白稲(中)ほそ葉白稲:陸奥南部領 ^⑩ 白志弥:奥民図彙 ^⑮		白稲:農業発達史2 ^⑦ 白稲:農業発達史別 ^{④⑩}	
岩手		(晩)白稲(中)しろ稲:享保書上 ^⑦ (中)しろ稲:八戸彈正 ^⑦		白稲:岩手県農業史 ^{⑤⑩} (中)白稲:農事試験報告 ^{③⑨} (早・中・晩)白稲:主要農作物 ^{④⑪} (晩・糯)白稲糯:主要農作物 ^{④⑪} 白稲:農事試験報告 ^{③⑨} (中)白稲:主要農作物 ^{④⑪} 白稲:稲種得失 ^{⑤⑩}	
宮城				白稲:農事試験報告 ^{③⑨} (中)白稲:主要農作物 ^{④⑪} 白稲:稲種得失 ^{⑤⑩}	
秋田		(晩)白稲:羽州庄内藩 ^⑩ (晩)白稲:羽陽秋北水土録 ^{⑤⑩} 白稲:東村山郷史 ^⑦		白稲:農事試験報告 ^{③⑨} (中)白稲:主要農作物 ^{④⑪} (中)白シネ:県農試百年史 ^{⑤⑩}	白しね、銀山白稲:農業発達史8 ^⑨
山形					
福島	白稲:荒田目遺跡木簡 ^①	(晩)白稲(晩)白しね(晩)野村白稲:会津農書 ^⑮ (晩)白稲,しろしね:会津歌農書 ^{②③} 白稲:農書全 ^{②④}			
茨城					
栃木					
群馬					
埼玉					
千葉					
東京					
神奈川					
新潟		(晩)しろ稲:越中国 ^⑩ (晩)白稲:加賀国 ^⑩ (中)白いね:越前福井領 ^⑩		白稲:農事試験報告 ^{③⑨}	
富山					
石川					
福井					
山梨		(中)しらいね:信濃伊奈筑摩郡 ^⑩ (中)しらいね, (中)白いね:美濃国 ^⑩			(粳)しろいね:遺伝資源 ^{④⑨} (関東・東山)
長野			(晩)白稲:静岡県農試史 ^{④⑤}		
岐阜		(中)白稲:参河加茂郡 ^⑩			
静岡					
愛知					
三重					
滋賀					
京都		(中)白稲:地方聞書 ^{②③} (糯)白稲:紀伊国 ^⑩			
大阪					
兵庫					
奈良					
和歌山					
鳥取		(中)白稲, (晩)白稲(与次兵衛):出雲国 ^⑩			
根拠					
岡山					
広島		(中)白稲:両国本草 ^{③⑩}		白稲, 桜白稲:初年以來沿革 ^⑬	
山口					
徳島					(粳)白稲(ケモミ):遺伝資源 ^{④⑨}
香川					
愛媛		白稲:県産業一斑 ^{②⑦}			
高知		(陸)白いね:筑前国 ^⑩ 白稲:県稲作坪刈概 ^{④④}	白稲もち:雑事紛冗解 ^{⑤①}		
福岡					
佐賀					
長崎					
熊本					
大分					
宮崎					
鹿児島					
地域不明		(中)目白稲:地方古伝, 白稲:牧民必要 ^{②⑦}			

注) 表中の文字列は左から順に、史料・報告書にあった1)品種の(早晩・粳糯)、2)品種名、3)掲載されていた史料・報告書の略名(正式名称は文末の表参照)。末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

表4 地域・時代別にみた「白早生」「白和世」「しろわせ」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・平安～江戸前期 648～1680	江戸中期 1681～1780	江戸後期 1781～1867	明治・大正期 1868～1926	昭和期以降 1926～1989
青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島	白和世：矢玉遺跡木簡①	(早)白わせ：陸奥国南部領⑩ (早)白わせ：八戸弾正⑦ (早)白わせ：亨保書上⑦ 白わせ：下伊沢大肝煎⑦ (早)白早稲：羽陽秋北水土録⑫ 白早稲：県勸業年報⑬ (早)白わせ：会津農書⑬歌農書⑭ (早)白わせ：地方名目⑦ (早)白わせ：陸奥国三春領⑩	白早稲：伝七勸農記⑫ 白早稲：会津風俗帳⑥	(中)白早生：主要農作物④① 白早生：県稲作史④⑤ (早)白早稲：主要農作物④① (早)白早稲：農事試験報告④① (中)白早稲：県農試百年史⑤③	白早生：農業発達史8⑨
茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川		(早)白わせ：常陸国水戸領⑩	(中)しろわせ：耕作仕様書⑫	(早)白早生：主要農作物④① (早)白早生：主要農作物④① (極早)白早稲：農業発達史6⑧	
新潟 富山 石川 福井 山梨 長野 岐阜 静岡	白わせ：小坂居付遺跡木簡② しろわせ：馬場屋敷遺跡木簡②	(早)白わせ：越州⑩ (早)白早稲：農事遺書⑪ (早)白わせ：福井領⑩	(早)白わせ：北越新発田⑫ (早)白早稲：小口村明細村鑑②	(早)白早稲：主要農作物④①	(稈)白早生：遺伝資源④⑨ (稈)白早生：遺伝資源④⑨
愛知 三重 滋賀 京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山		(早)しろわせ：信濃高遠領⑩ (早)白わせ：美濃国⑩ (早)白わせ：駿河国御厨村⑩ (早)しろわせ：遠江懸川領⑩ 白早稲：駿河国柏木家① (早)白わせ：参河国加茂郡⑩			
鳥取 島根 岡山 広島 山口		(早)白わせ：和泉国岸和田領⑩ (早)白わせ：紀伊国⑩	白早稲：豊秋農笑種⑫	白早稲：岡山の米④⑩	
徳島 香川 愛媛 高知 福岡 佐賀 長崎 熊本 大分 宮崎 鹿児島		(早)白ワセ、(中)白早稲：両国本草全④⑩	(早)白早稲：阿波国⑩		
地域不明		(早)白早稲：地方古伝⑦			

注) 表中の文字列は左から順に、史料・報告書にあった1)品種の(早晩・粳糯)、2)品種名、3)掲載されていた史料・報告書の略名(正式名称は文末の表参照)。末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

5)「足張」「檜張」「縮張」「すぐはり」の場合 (表5参照)

表5は「足張」「檜張」「縮張」「すぐはり」(一括表示は「すぐはり」)の‘足跡’である。「すぐはり」の場合は漢字表記が木簡出土の「足張」のほかに「^{すぐはく}檜張」

(『清良記』)、^{しゆくはり}「縮張」「すくはり」(ともに『主要農作物耕種要綱』)があるが、いずれも「すくはり」と読むことから同一品種と考えた。

表5 地域・時代別にみた「足張」「檜張」「縮張」「すくはり」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・平安～江戸前期 648～1184	江戸中期 1681～1780	江戸後期 1781～1867	明治・大正期 1868～1926	昭和以降 1926～
青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島	足張:矢玉遺跡①				ツクバリ:農業発達史8⑨
茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川					
新潟 富山 石川 福井					
山梨 長野 岐阜					
静岡 岡崎 愛知 三重					
滋賀 京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山		アンバリ:地方竹馬集⑳ (早)すくはり、(晩)すくはり:地方の閑書㉑ (中)すくばり、(晩)すくばり、(糯)すくばり:紀伊国㉒			
鳥取 島根 岡山 広島 山口			(晩)縮張:農事試報告㉓	(晩)すくはり:主要農作物㉔ (晩)縮張:主要農作物㉕ (晩)スクバリ:岡山の米㉖	
徳島 香川 愛媛 高知		(疾中)檜張:清良記㉗			
福岡 佐賀 長崎 熊本 大分 宮崎 鹿児島					
地域不明		す衛はり:牧民必要㉘			

注) 表中の文字列は左から順に、史料・報告書にあった1)品種の(早晩・稈糯)、2)品種名(細字は疑問の残る品種名)、3)掲載されていた史料・報告書の略名(正式名称は文末の表参照)。末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

「すくはり」は同じ出土木簡品種でも他品種とは異なり、名が特異でなじみにくい。そのせいもあるのだろう。他の品種に比べ‘足跡’が残る資料は少なかった。

まず江戸時代だが、‘足跡’を探し当てた資料は南伊予の『清良記』のほか、紀伊国の『地方の聞書』と『諸国産物帳』の3点に限られた。ただし江戸時代に「すくはり」の‘足跡’が存在した、と考えられる地域がもう一つある。島根県である。農事試特別研究報告(1908)²⁴⁾には島根県の「亀治」の来歴について〈本種ハ荒島村廣田亀次ナルモノ(中略)明治三年ヨリ同八年二至ル間、晩稲縮張種中ヨリ拔穂ヲ行ヒ選出セルモノ〉とある。とうぜんこの地方には少なくとも幕末からは「縮張」が植えられていたに違いない。

明治以降では明治末に岡山県阿哲郡に「スクバリ」があり²⁵⁾、大正初年には島根県では漢字の「縮張」、鳥取県ではカナ書きの「すくはり」がある²⁶⁾。地図でみると、岡山県阿哲郡は鳥取・島根県境に近い県北にある。この地域一帯に「すくはり」が植え継がれていたのだろう。

「すくはり」は「足張」の名から程が強剛で根張りのよい稲を連想させる。「足張」「檜張」「縮張」と漢字は変わるが、もともと文字に弱い農民が口伝えで植え継いできた品種である。奈良平安の「足張」が、倒伏し易い湿田地帯などで植え継がれ、明治大正の山陰の「すくはり(縮張)」につながったのではないだろうか。

6) 「地藏子」「ちもとこ」「ちっこ」の場合 (表6参照)

表6に荒田目遺跡の出土木簡にあった「地藏子」、『散木奇歌集』の「ちもとこ」、『夫木和歌抄』の「ちくら、ちもとこ」、『清良記』の「小児」²⁷⁾、その同系とみられる「ちっこ」「珍子」(一括表示は「ちもとこ」)の‘足跡’をたどってみた注4)。

表6をみると、「ちもとこ」も江戸時代までは北越から中国・四国の各地に‘足跡’が認められる。ただ明治になると、すべてが「ちっこ」「珍子」に変わっている。「ちもとこ」より「小児」「ちっこ」「珍子」のほうが農民にはなじみやすく、その故に置き換えてきたのだろうか。

「ちもとこ」は漢字にすれば「千本子」であり、穂数型の品種であったのだろう。ちなみに明治になると、近畿以西の各府県に「千本」^{せんぼん}が姿をみせる。嵐²⁸⁾は「千本」を17世紀ころからみられようになった穂数型品種「一本千」^{いっぼんせん}の同系とみなしているが、中には「ちもと」の漢字読みも含まれていたのではないだろうか。

表6 地域・時代別にみた「ちもとこ」「ちこ」「ちっこ」「珍子」名品種の登場する史料と報告書

道府県名	奈良・平安～江戸前期 648～1184	江戸中期 1681～1780	江戸後期 1781～1867	明治・大正期 1868～1926	昭和以降 1926～
青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島	地蔵子：荒田目遺跡①				
茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川				(早)珍子早生：農業発達史6⑧	
新潟 富山 石川 福井		(早)ちっこ：耕稼春秋⑩ (早)ちっこわせ：加賀国⑩	ちん子：伊藤家稲帳⑦	(中)チンコ：農業発達史6⑧	白チンコ：遺伝資源⑨
山梨 長野 岐阜		(中)大ちこ、(中)小ちこ、(中)ちんこ(晩)ちこ等：美濃国⑩		珍子：大蔵米穀論⑤	
静岡 愛知 三重		(晩)大ちこ、(晩)小ちこ、青ちこ等：尾張国⑩			
滋賀 京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山	ちもとこ(たもとこ)：散木奇歌集③ ちくら、ちもとこ：夫木和歌抄⑤	ちこ：地方竹馬集⑨ (早)ちんこわせ：和泉岸和田領⑩		(早)早生珍子：農業発達史6⑧ (中)ちっこ、(中)錦ちっこ：主要農作物④	ちんこもち：遺伝資源⑨
鳥取 島根 岡山 広島 山口	ちもとこ：田植草紙⑥	(中)ちこ、(中)小ちこ：出雲国⑩ (早)ちこわせ：隠岐国⑩ (早)ちご稲(中)チモトコ、(晩)ちこ：両国本草⑩		チンコ種：岡山の米④	
徳島 香川 愛媛 高知		千本：農術鑑正記⑦ (晩)小児：清良記⑩	(早)ちこ稲、(中)ちもとこ(あらし)：阿波国⑩		ちこもち：遺伝資源⑨
福岡 佐賀 長崎 熊本 大分 宮崎 鹿児島					
地域不明		ちこ：続地方落穂集⑨			

注) 表中の文字列は左から順に、史料・報告書にあった1)品種の(早晩・粳糯)、2)品種名、3)掲載されていた史料・報告書の略名(正式名称は文末の表参照)。末尾の丸数字は資料番号(文末参照)。

3. おわりに

— 古代品種からみえてきた在来品種の‘したたかさ’ —

〈奈良・平安時代の古跡出土の木簡に記されていたと同じ名の品種がおおよそ1000年後の江戸中期の農書『清良記』などにも認められた〉という考古学調査の報告をみて、それなら江戸中期以降は…と、同じ名の品種について資料に残る‘足跡’をたどってみた。

対象にしたのは奈良・平安の木簡に記されていた24品種中の6品種「畔越」「古法師」「白稲」「白早生」「足張(すくはり)」「地蔵子(ちもとこ)」で、いずれも江戸中期の農書『清良記』『会津歌農書』にも登場する品種である。

‘足跡’をたどってみて驚かされたのは、これら6品種の名が奈良平安からおおよそ1000年後の江戸時代の全国各地の資料にも広く登場することである。しかもそのいくつかは明治になっても残っていて、「白稲」「白早生」は寒冷地に、「畔越」は近畿中国にと、それぞれの地域に集束して植え継がれている。

平川は古代品種が江戸時代まで長生きした理由として出挙制をあげているが、それが及ばなくなっただけからの年月も久しい。江戸時代になると「幕府の稲種強制」という話もある²⁹⁾。また九州肥後藩では藩主まで新品種導入に熱心で、九州外も含む他藩から多数の多収品種を導入していたという³⁰⁾。

にもかかわらず、なぜ「畔越」「白稲」「白早生」そして「すくはり」が生きながらえ、しかも時代時代にそれぞれの地域に定着しているのか。そこには同名異種がただランダムに広がったというのではなく、歴代の農民の意志が働いていたことが想定される。

佐藤洋一郎著『稲の日本史』³¹⁾を読むと、糯が常食の北ラオスでは稲品種が糯性の違いだけで決められていて、他の形質の変異は大きく、私たちの目からみれば〈品種の集合体〉としかみえないと述べている。この経験から彼は日本の農書にある品種についても「当時の人にとって〈さしさわりのない範囲〉でいろいろな遺伝子型の個体が混ざっていたのでは」と推測する。

農書どころか、木簡時代から植え継がれてきた品種のことである。「畔越」「白稲」などの古代品種も粳糯、早晚生、芒や籾色などに差があっても、他形質はくさ

しさわりのない範囲〉で〈いろいろな遺伝子型の個体が混ざっていた〉のだろう。そしてそれが、これらの品種をそれぞれの地域に根づかせ、それぞれの時代の荒波を乗り越えさせる素地になってきたのだろう。

この調査研究で、‘足跡’の追跡をはじめたとき懸念したのは、「古法師」「白稲」「白早生」という名が特定の品種のものでなく、同じ特長をもつ稲集団の一般名称ではないかということであった。確かにその可能性は十分考えられる。だが‘追跡’を終えた今思うのは、同名異種ではなく古代品種のもつ‘さしさわりのなさ’、多様性の存在である。この多様性こそが古代品種の姿なのだろう。歴代の農民たちはこの多様性豊かな古代品種の中から、それぞれの時代、それぞれの地域に適する形質を選び出し、その時代その地域にふさわしい「畔越」「白稲」「白早生」そして「すくはり」をつくりあげてきたのだろう。

もともと品種というものは、無芒の稲・白い稲・白い早生など同じ特長をもった稲集団のグループ名であったものが、歴代農民の手によってその時代・その土地の環境に適応するように研ぎすまされ、その後の「法師」「白稲」「白早稲」などという在来品種に育ってきた、ということもできよう。

それにしても現在、現役の品種の中で最長寿とされるのは慶長元年(1596)生まれの「太郎兵衛糯」の425年であるといわれる³²⁾。だが「畔越」「白稲」などの場合は木簡の時代から現代までおよそ1300年。なにが人びとをしてこれほど長く植え継がせてきたのか。そこに人びとのどんな想いが働いていたのか。興味をそられる問題である。

最後は「すくはり」についてのなかば幻想だが…

明治8年(1875)に島根県の農家広田亀治が在来種「縮張」の変わり穂から「亀治」を育成したという話は既に述べた。「亀治」は後に当時日本統治下の台湾に渡り、同地の主力品種「台中65号」(亀治×神力)の片親となる。

その「台中65号」はさらにマレーシアに渡り、1965年に同地にいた日本人専門家の手によってこの国の奨励品種「マスリ Mahsuri」(Mayang Ebos⁸⁰×台中65号)の育成に貢献した。その「マスリ」はマレーシアで昭和48年に乾期作8.4万ha(42%)、雨期作11.3万ha(30%)まで普及している。他の東南ア諸国でも評価が高くインドでは最高71万ha、バングラデッシュでは「パジャム」の名で47万haまで普及した³³⁾。

木簡出土品種の「足張」と島根の「縮張」がどの程度遺伝的につながるか
どうかは知る由もないが、もし奈良・平安の昔から日本の農民の手で植え
継がれてきた「すくはり」が時空を超えて現代の東南アジアの農家に引き
継がれているとしたら… こちらは夢を誘う話である。

注

注1) 『清良記』の成立年代については諸説があるが、ここでは伏見元嘉(2011)『中近世
農業史の再解釈—『清良記』の研究』に準じ延宝3年(1675)～延宝7年(1679)と
考えた。

注2) 地方書：幕政の末端を担った^{じかたしよ}地方役人や^{じかた}村役人の年貢の取り立てや石高の算定職務
の際の参考手引き書。

注3) 『享保・元文諸国産物帳：信濃国筑摩郡』には〈こぼし(こぼうし)〉とある。本
稿ではこれを参考に「こぼし」は「古法師」と同名種と考えた。

注4) 正倉院文書「馬養啓」は東京帝国大学編『大日本古文書巻之一五』(国立国会図書
館デジタルコレクション)に原文が写真版で収録されているが、「越特子」とも「越持
子」とも読める。ここでは前者を採用した。

注5) 鎌倉後期の『夫木和歌抄』に〈君が代は数へ尽さんかたそなき／なかにちくらち
もこのいね〉という歌があるが、率直にいつて「ちくらこ」「ちもとこ」が同種である
か、異種であるか。また後代の「小児」「ちっこ」「珍子」がそのいずれか、または両者に
つながるか否かについては疑問が残る。ただし、ここではいずれも「ちもとこ」につなが
ると考え論を進めた。

表1～6の引用資料名

注) *は国立国会図書館デジタルコレクションを利用。

- ① 平川 南(2008)『日本の原像』小学館
- ② 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団(2012)「白根バイパス関係発掘
調査報告書Ⅱ 小坂居付遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第238集
- ③ 源俊頼(1128 ころ)『散木奇歌集』新校群書類従第11巻巻254*

- ④ 橘成季(1254 ころ)『古今著聞集』本莊栄次郎編:日本経済史文献、日本評論社*
- ⑤ 藤原長清(1310 ころ)『夫木和歌抄』国書刊行会*
- ⑥ 高野辰之(1943)「田植草紙」『日本歌謡集成』第5、東京堂*
- ⑦ 安田 健(1954)「稲作の慣行とその推移」『日本農業発達史』2 中央公論社
- ⑧ 安田 健(1954)「水稻品種の推移とその特性把握の過程」『日本農業発達史』6 中央公論社
- ⑨ 安田 健(1954)「水稻における統一品種の交替」『日本農業発達史』8 中央公論社
- ⑩ 盛永俊太郎・安田健編(1986)『江戸時代中期における諸藩の農作物―享保・元文諸国産物帳から―』日本農業研究所
- ⑪ 古島敏雄(1975)「日本農業技術史」『古島敏雄著作集』6 東京大学出版会
- ⑫ 佐藤常雄(1980)「甲州における稲種の分布と変遷」『近世稲種論と稲作生産力の展開』学習院大学東洋文化研究所
- ⑬ 穠本洋哉(2015)『日本農業近代化の研究』藤原書店
- ⑭ 中村喜時(1776)「耕作晰」『日本農書全集』1 農文協
- ⑮ 比良野貞彦(1781~1800)「奥民図彙」『日本農書全集』1 農文協
- ⑯ 土屋又三郎(1707)「耕稼春秋」『日本農書全集』4 農文協
- ⑰ 鹿野小四郎(1709)「農事遺書」『日本農書全集』5 農文協
- ⑱ 土居水也(1675~79)「清良記」『日本農書全集』10 農文協
- ⑲ 佐瀬与次右衛門(1684~1709)「会津農書・会津農書付録」『日本農書全集』19 農文協
- ⑳ 佐瀬与次右衛門(1704)「会津歌農書」『日本農書全集』20 農文協
- ㉑ 福島貞雄(1839~42)「耕作仕様書」『日本農書全集』22 農文協
- ㉒ 九之助ほか(1830)「北越新発田領農業年中行事」『日本農書全集』25 農文協
- ㉓ 大畑才蔵(1688~1704)「地方の聞書」『日本農書全集』28 農文協
- ㉔ 著者不祥「農書 全」『日本農書全集』37 農文協
- ㉕ 鈴木秀問「伝七勸農記」『日本農書全集』37 農文協
- ㉖ 戸谷源八「豊秋農笑種」『日本農書全集』61 農文協
- ㉗ 『地方古伝: 地方万覚之事』*
- ㉘ 平岡直之他(1689)「地方竹馬集」『近世地方経済史料』2*
- ㉙ 武陽泰路 大月忠興(1763ころ)「続地方落穂集」『日本経済叢書』10*
- ㉚ 烏田智庵ら(1735~)『両国本草全』*

- ③① 細川重賢(1751~63, 1801~30)『雑事紛冗解』 嵐写本
- ③② 照井浄因(1787)「羽陽秋北水土録」『続日本経済叢書』3巻＊
- ③③ 曾繁・白尾国柱(1804)『成形図説』＊
- ③④ 第4回内国勸業博覧会事務局(1896)『第4回内国勸業博覧会審査報告』
- ③⑤ 大脇正淳(1900)『米穀論』裳華房＊
- ③⑥ 石川理紀之助(1901)「稻種得失弁」『日本農業発達史』2:749 中央公論社
- ③⑦ 高知県内務部(1902)『高知県産業一斑』＊
- ③⑧ 京都府農事試験場(1905)「京都府農事試験場特別報告」京都府
- ③⑨ 農商務省農事試験場(1908)「米ノ品種及其分布調査」『農事試験場特別報告』25
- ④① 岡山県内務部(1910)『岡山の米』＊
- ④② 農商務省農務局編(1913)『主要農作物耕種要綱』大日本農会＊
- ④③ 新潟県内務部(1914)『越佐の米』新潟県
- ④④ 広島県農会(1934)「農家の金字塔」『芸備農報』494号
- ④⑤ 早川孝太郎(1950)『佐賀県稲作坪刈の研究』農林省農業総合研究所
- ④⑥ 静岡県農事試験場(1952)『静岡県立農事試験場史』静岡県農事試験場
- ④⑦ 鎌形勲(1953)『山形県稲作史』農業総合研究所
- ④⑧ 山口県編(1956)『山口県の稲作50年』山口県
- ④⑨ 田中稔・相馬幸穂(1958)「青森県における水稻品種の変遷と品種改良の効果」『日本農業発達史 別上』中央公論社
- ④⑩ 農林省農林水産技術会議事務局編(1970)「昭和37~40年に収集したわが国の在来稲品種の特性」農林省農林水産技術会議事務局
- ⑤① 岩手県(1979)『岩手県農業史』岩手県
- ⑤② 三木森雄(1979)「和歌山県における水稻品種の変遷」『農業技術』34号、農業技術協会
- ⑤③ 大豊町史編纂委員会編(1987)『大豊町史』大豊町教育委員会＊
- ⑤④ 福島県農業試験場(1996)『福島県農業試験場百年史』福島県農業試験場

引用文献

- 1) 平川南(1999)「新発見の「種子札」と古代の稲作」、国史学169号 1~56頁、国史学会
- 2) ー (2008)「米作国家の始まり」『日本の原像』86頁、小学館
- 3) 土居水也(年代不詳)「清良記(親民観月集)」『日本農書全集』10巻48~54頁、農文協
- 4) 大畑才蔵(元禄年間)「地方の聞書」『日本農書全集』28巻19~20頁、農文協
- 5) 佐瀬与次右衛門(1704)「会津歌農書」『日本農書全集』20巻89頁 農文協
- 6) 安藤廣太郎(1959)『日本古代稲作史研究』205、農林協会
- 7) 古島敏雄(1946)「日本農業技術史」『古島敏雄著作集』6巻172頁、東京大学出版会
- 8) 嵐嘉一(1975)『近世稲作技術史』298頁、農文協
- 9) 前掲(平川：原像)86頁、小学館
- 10) 前掲(平川：原像)88、92頁、小学館
- 11) 盛永俊太郎・安田健編著(1986)『江戸時代中期における諸藩の農作物ー享保・元文 諸
国産物帳からー』日本農業研究所
- 12) 広島県農会(1934)「農業家の金字塔」『芸備農報』494号25~52頁
- 13) 大豊町史編纂委員会編(1987)『大豊町史』202頁、大豊町教育委員会
- 14) 農林水産技術会議事務局(1970)「わが国の在来品種の特性」
- 15) 平岡道敬(1689)「地方竹馬集」『近世地方経済史料』2巻261頁
- 16) 農商務省博物局(1883)「米由来記」『米麦共進会報告』農商務省農務局
- 17) 石川理紀之助(1901)「稲種得失弁」『日本農業発達史』2巻 749頁 中央公論社
- 18) 『地方古伝：地方万覚之事』8頁
- 19) 安田健「水稻における統一品種の交替」日本農業発達史 8巻 298頁 中央公論社
- 20) 田中稔・相馬幸穂(1958)「青森県における水稻品種の変遷と品種改良の効果」『日本
農業発達史』別上 450頁、中央公論社
- 21) 中村喜時編「耕作晰」『日本農書全集』1巻24頁、農文協
- 22) 高知県内務部(1902)『高知県産業一斑』121頁
- 23) 伝七『伝七勸農記』『日本農書全集』37巻 135頁、農文協
- 24) 農商務省農事試験場(1908)「米ノ品種及其分布調査」『農事試験場特別報告』25頁
- 25) 岡山県内務部(1910)『岡山の米』123頁

- 26) 農商務省農務局編(1913)『主要農作物耕種要綱』215, 219頁、大日本農会
- 27) 前掲(平川：原像)73頁、小学館
- 28) 前掲(嵐：稲作技術史)336頁、農文協
- 29) 佐藤常雄(1980)『近世稲種論と稲作生産力の展開』5頁、学習院大学東洋文化研究所
- 30) 前掲(嵐：稲作技術史)319～20頁、農文協
- 31) 佐藤洋一郎(2002)『稲の日本史』149～151頁、角川書店
- 32) 西尾敏彦・藤巻宏(2020)『日本水稻在来品種小事典』92頁、農文協
- 33) 山川寛ほか(1977)「マレーシアにおける2期作用水稻品種」『熱帯農業』21号40
～42頁